土香る会

読書会感想文集 Vol.24

2019年6月

【目次】

第27回読書会(2019.6.22)

クロポトキン の相互扶助、有島武郎の相互扶助に関する会員アンケートの結果・・・・ P1～

※ 土香る会が毎月行っている「読書会」に参加した方々が寄せた、感想文と報告を掲載しています。

今号（Vol.22）からは、これまでの作品別の読書会ではなく、テーマ別の読書会、

いわば第2シリーズの読書会感想文集となりました。

●問合せ先／土香る会事務局（有島記念館内）0136-44-3245

第２７回読書会のまとめ
相互扶助に関する二つのアンケートをもとに
2019.6.22／参加者７名（うちアンケート回答提出５名）

【アンケート１】「相互扶助」は、動物にも人間にも見られること？

クロポトキン『相互扶助論』を話し合ったとき、「相互扶助は精神的なものだと思うから、動物には相互扶助はない」という意見が出されたのが出発点でした。しかしその後のアンケート結果を見てもそのような意見は少数で、圧倒的な支持は、動物にも人間にも相互扶助はあるという意見の方でした。そのせいなのか、話し合いの場でも「相互扶助ある派」のパワーは凄まじいものがありました。

人間（の歴史）の底にあるものが社会の進化につれて見えなくなっている、という意見がありました。底にあるものが即ち本能であり、相互扶助です。社会は進化につれて階層化されるので、それのない社会を目指したいというのがクロポトキンや有島武郎の考えで、つまりは本能（＝相互扶助）を取り戻そうと主張したのだと。

別の見方がありました。社会の進化につれて、人間は利己的な部分が増えてきたと言えます。すると争いが起こります。争い（争う感情）は人間に元々備わったものではなく後から出てきたもので、動物には無益な殺し合いは見られないことから考えると、その点で人間は後退していると言えるのではないか、というものでした。

なぜ後退していくのでしょう。それにはこんな意見が出ました。本能は理性や理論では理解できないことなのだが、人間は知的（頭で考える）レベルでの生活に慣れてしまっているので、容易に本能を取り戻すことが出来ない。逆に言うと、本能は生きる前提になっているものだから、動物は相互扶助なくしては生きられない。人間の場合も、生きるのに必死な人の方が本能に近い考え方、感じ方をしているので、相互扶助を体現しやすいのだ、という意見です。

精神や理想などを考えて、人間は動物とは違うのだと普通は考えます。しかし動物（＝ヒト）から人間になって、相互扶助どころか生物としての本能さえ失いかけているのではないかと憂慮する意見もありました。その後に、だから人間にこそ相互扶助が必要なのだと続きました。余談ですが、「ヒト」「人」「人間」という言葉の違いに言及する意見も面白かったので、アンケート集約も是非お読み下さい。

相互扶助は性善説そのものだという意見で「相互扶助ある派」を一括り出来るように思えましたが、言い過ぎでしたらごめんなさい。

片や、「相互扶助ない派」の意見に対してです。

所得の多い人と少ない人との間では、相互扶助は成立しないという「ない派」の意見に、考え方

が違うのでは？例として不適切だとの反論がありました。上下関係があっても、そういったレベルの違いを無視できる関係が相互扶助だ、という「ある派」の主張です。また、利他的行動というのは、自分の得にはならないが、相手の利益になることをする事であり、互いの思いを共有することが大事なのだという意見が出ました。雪道での立ち往生のケースでも、立ち往生した人を助けるのは親切なんかではなく、これこそまさに相互扶助だというのが「相互扶助ある派」の意見でした。

それぞれの言うところを聞いて、相互扶助をどう捉えるかのステージが違っているので議論がかみ合っていないという意見が出ました。最後に、物差しが見えない議論になっているが、それでよいのかもということになりました。動物にも人間にも相互扶助はあるのか、人間だけにあるのかという話し合いだったのですが、つまりは、結論はまとまらなかった、という結論だったように思いました。

【アンケート２】

有島武郎が農民に託した農場運営にとって、「相互扶助」は目的それとも手段？

クロポトキンは、小さなコミュニティを支えるのが相互扶助だと考えました。有島武郎は、小さな共同体すら必要ないと考えました。それは心酔したホイットマンの影響だろうということでした。共同体は不必要で、大事なのは個人主義だが、個人主義だけの社会は実現するはずがない。実現はしないが、それを押えておかないと（つまり、個人主義を土台として考えないと）組織は腐っていくものだ。武郎が考える最小単位は個であって、共同体ではない。だから共同体から相互扶助を論じるのは適当でないという指摘がありました。また、相互扶助は共同体をまとめるのに必要なものという感想に対しては、そうではないと思う。さらに、縦軸と横軸の両方が武郎の相互扶助には含まれているという考えは面白いが、むしろ縦軸と横軸の交点に相互扶助があるのではないか、つまり、文字通りの原点そのものと考えられるという意見も出ました。簡単に割り切れるテーマでないことは分かっているつもりですが、それにしてもちょっと話が難しくなりすぎた感がありました。

農場解放した後、小作人たちが力を合わせて相互扶助の精神で困難を乗り越えて行くことを期待した武郎ですが、そうであれば解放したまま何もせず小作人たちの自主性に任せればよかったのに、どうしてその後の共生農団づくりや資金面など諸々の準備をしてやったのか、矛盾していないかという質問が出ました。その回答として、新しい道にレールを敷いてやって引き渡すのは確かに一見矛盾だが、それは彼等にその後のトレイン（訓練）とクリエイト（創造）を託したからだ、という意見がありました。個々の農民には理解できないだろうが、取り敢えず新しい形を創り出してみるのだという武郎の気持ちの表れだろうという意見もあり、そのことは確かに『農場開放顛末』に出てきます。

農場解放が「家からのしがらみから解かれる準備としての放棄だった」のではという意見に対し

ては、考え方に疑問がある。農場解放は、家や土地を処分することで第３階級としての自分をもっと身軽にしたいということ、つまり第４階級に限りなく近づきたいことの表れと取るべきだという意見がありました。

武郎自身の中でも「良い自分」と「悪い自分」の葛藤があり、自分の進む道にレールが敷かれていることへの反発があったので、どちらかにはっきりさせたかった。父親の死が一歩踏み出す転機になったと言えるという意見がありました。余談ですが、親の死が転機になるというのは自分の経験とも一致しているとの意見も出ました。それにしてもです。敷かれたレールに反発する武郎が、小作人たちにレールを敷いてやるのは矛盾していると思いませんか？

それはともかく武郎としては、最低限のことは用意しておくからあとは自分たちで考えてほしい、とにかく労働者自らが考えることでしか成功しないことなのだ、そのためには個々がバラバラにならないように考え支え合うのが相互扶助なのだと言いたかったようです。

「武郎が自己のあるべき姿を示した」と感想にありました。「あるべき姿」というのは第４階級（労働者）にいる自分の姿であり、それは実現不可能なことなので、小作人たちに託したということです。「あるべき姿」には「（現在）ある姿」が対比され、それは第３階級（ホワイトカラー）にいる自分ということになります。武郎の考えから階級（＝社会階層）は切り離せないようです。

相互扶助は目的か手段か？という問いかけでしたが、正解はなくどちらでもいいのだということでした。または、両方とも正解なのでしょう。この問いをきっかけにして相互扶助について考えを深められたら幸いです。

（文責：井上剛）

※参加者：磯野浩昭、磯野美和、井上剛、梅田滋、菊地寛、菊地昌子、佐藤智恵子（五十音順）

土香る会読書会アンケート（その2）／2019年5月

【問】「相互扶助」は、動物にも人間にも見られること？　それとも人間だけ？

４月の読書会で学んだクロポトキンの『相互扶助論』は、ダーウィンの「進化論」解釈において通説とされてきた「適者生存の原理、生物界の不断の闘争と生存競争における相互闘争の法則」よりも、「進化論」のもう一つの理論的基軸である「相互扶助の法則」こそが種の進歩的進化により大きく寄与してきた、という学説です。

言い換えれば、動物界も人間社会も今日まで存続し続けることができたのは、「相互扶助」を意識的に努力して続けてきたから、ということではなく、本来動物界にも人間社会の中にも備わっていた当たり前のものである「相互扶助」が、動物界と人間社会の持続的存続の根本要因である、という主張でした。

そして、にも関わらず近代国家成立以降の人間界はその「相互扶助」を破壊してきた、という問題提起を込めた学説でもありました。

このようなクロポトキン の『相互扶助論』は、「どうも解らない」「何か腑に落ちない」という感想が読書会の参加者から出されました。引っ掛かっているのは、人間と動物の違いです。相互扶助は精神性を伴ったものだと思うので、動物にはあり得ない、という主張でした。

一方で他の参加者からは、テレビなどで紹介される生態系の様々な様子から判断すると、クロポトキンが言うように動物にも人間にも相互扶助はあったのではないか、という意見も出されました。

この相違のポイントは、相互扶助とは何を指すのか、ということになりそうです。
同じような行動を取っていても、人間と動物では違いがあるのでしょうか。

次回以降も継続的に話題にすべき、とても大事な視点だと思いました。
そこで、この問題をみなさんと一緒に考え続けたいので、みなさんのご意見を求めます。
下の三択から選んだ選択肢に印を付けて、事務局梅田に返信してください。

【質問と回答】

「相互扶助」は、動物にも人間にも備わった生存戦略だと思いますか？
それとも、人間だけに備わった生存戦略だと思いますか？
次のなかから、一つだけ選んでください。

1　「相互扶助」は、動物にも人間にも備わった生存戦略だと思う
2　「相互扶助」は、人間だけに備わった生存戦略だと思う
3　わからない

※上記の選択をした理由などについて、お書きください。

アンケートへの回答から

● A さん

【選択回答】

1.の動物にも人間にも備わった生存戦略を選択します。

【理由】

本能的に備わった相互扶助が動物にもあるとしたら、性善説が有利な立場になります。私自身、キリスト教者ではないのと、頭がまだこなれていないので、生物の教科書にあった生物の発生や進化をほぼ信じています。人間は何かのトリガーがあって誕生したのかもしれませんが、動物らしく肉体を持ち、細胞が共鳴しあい、脳が高次の欲求を果たそうとして、心理的なものも精神的なものもスピリチュアル的なものを総動員して制御していると思います。人間に特別なことがあるとすれば、罰あたりを恐れたり、良心の声に従った行動と私欲や保身の狭間でよろめいていることかもしれません。となると、生まれた環境や取り巻く環境が大きく影響しているということになるので、本能という言葉は性善説的に使用して、生物の教科書に洗脳されている私は、進化の大先輩である動物の良い本能ー相互扶助ーを受け継いだと考えます。

● B さん

【選択回答】

３.わからない

【理由】

取り敢えず今思っていることを回答としますが、考えれば考えるほど分からなくなります。

動物の場合、相手のことを考えてやっているとは思えない。

人間の場合は、生来的に備わったものだと言えるかどうかわからない。

【理由：その２（追加)】

１．動物の場合、相互扶助はない

敵（自分たちより強い相手）に仲間が捕まったのを見て、何頭もが集団でその仲間を助けるべく立ち向かうのを TV で見たことがある。結果、運よく助かる場合も、そうでない場合もある。逆に、一頭が犠牲になることによって他の仲間が難を逃れることができることも知っていて、早めの判断として知らんぷりをする場合もある。仲間を助けたいのが優先なのか、自分（たち）が助かるのが大事なのか分からない。助けるべく皆でやってみて、ダメと判断したら諦めるということなのだろう。

それらしく見える行動も、

１）自分が生存するために必要だから

２）自分と同じ仲間（家族など）を守る（生き延びさせる）ため、又は、グループの構成数を減じないために

３）自分の属する種全体の勢力を維持発展させるために

取るものであって、本能的なものに近い（又は本能そのもの）と言ってよい。相互扶助の精神でやっているとは考えられない。何百年、何千年を掛けて経験を積み重ねた結果、習性のようになって行ったと思われる。

２．人間の場合、相互扶助はあるともないとも言える（いい加減！）

相互扶助とは何をすることか？を考えるときに、相互扶助が成り立つのはどういう関係の時か？と考えてみた。例えば、所得のとても多い家庭と少ない家庭でそれが成り立つだろうか？多い→少ないという方向で援助の手を差し出すことはあっても逆はないのではないか。そうであれば相互扶助とは言えない（一方的扶助とは言えるが）。

救いの手を出す、助けるということは、相手がそれを欲していると思うからするので、相手には必要ないだろうと思えば手は出さない。もちろん貧富とか立場の違いを超えたところで救いの手を差し出すことはケースとしてあり得る。川で溺れているとか、駅のホームから転落したなどの生命に関わる場合や、事故や病気で救急車や警察を呼ぶ場合、また、雪道で立ち往生しているときに助けたりするのは親切（時にそれ以上のもの）であって相互扶助とは言わないように思う。強引に一般化すれば、立場、身分などが比較的近いと思われる人たちの間で相互扶助が成り立つのではないか。

ここまで考えて、ふと、辞書には何と書いてあるかなと思ったので、早速引いてみる。
ちゃんと書いてあった。

互助・・・同じような環境・境遇にある人びとが互いに助け合うこと。

（下線は引用者。三省堂『明解国語辞典』より）

頭をひねり、絞りに絞って考えたことがあっさり辞書に出ていて、ガックリきた。互助は相互扶助の短縮形だと思っているので、同じと考えている。その定義から考えるに、人間ならあまねく持ち合わせているものではないように思う。「相互」という言葉がポイントになるだろう。だから、上に述べたように立場、身分が違えば相互扶助は成り立たない。

相互扶助が成立するとすれば、どの時代であってもそれは弱者の間に、である。もしくは同じ境遇だと思える集団の中である。同じ境遇であれば、互いに助け合って困難を乗り越えるのが相互扶助であるし、境遇が違っても等価値なもののやり取りに合意すれば相互扶助だと言えるだろう。借りっ放し、貸しっ放しでは相互扶助とは言わない。それは上下関係ができてしまうからだ。

時代によって相互扶助が続かなくなったのは、一人ひとりの能力の差が明らかになり、それが貧富の差になり、影響力の差になり、上下関係になっていったからではないか。逆に言えば、格差のある社会であっても底辺層の人びとの間では、また日本でも一億総中流と言われた時代にあっては中下層ではお互い様の相互扶助はあったと思う。境遇が違ってきたときに、同時に分断が始まるように思う。それでも相互扶助の精神が生き残っている、あるいは復活するとすれば、それは権力者側に「人、皆同じ」の考えがあり、それに基づいて政治が行われ、社会全体がそれを良しとして受け入れたときだろう。それまでの階級社会、格差社会が革命などによって転覆し、価値観が「人、皆同じ」という方向へ変わったときもそうかもしれない。

今のところの自分の結論としては、人間の場合、相互扶助は限定的に成り立つということになるだろうか。

● Ｃさん

【選択回答】

１、相互扶助は、動物にも人間にも備わった生存戦略だと思う

【理由】

動物の中には、象や狼など、団体で生活し、生命的食糧獲得的に個人の損害に成る場合にも助け合う行動がある・・・

等が１番選択の理由です。

その他の動物にも利他行的行動はある様です。バイソン等・・。

● Ｄさん

【選択回答】

１　「相互扶助」は、動物にも人間にも備わった生存戦略だと思う

【理由】

この結論を導き出すために「ヒト」「人間」の定義を明確にしてみました。

「ヒト」

・動物界　脊椎動物門　脊椎　～　ヒト属　ヒト亜種　ヒト

ホモ・サピエンス

「人間」

・文化があるとされる。

文化とは本能ではなく学習によって身に着ける行動である。

―衣食住、技術、学問、芸術、宗教、政治など―

・何故「ヒト」を「人間」と呼ぶようになったのか？

その背景には動物（チンパンジー）の心理や知能の研究の結果

「ヒトと動物」の差が小さくなった。道具の使用、製作、言語能力や抽象能力の差も無くなった。

この様な経過の中で一貫して流れているものこそ

→　人間は単なるヒトでは無い。

→　人間と動物は違わなくてはならない。

つまり「動物（ヒト）」と違う、差別化（優位性）を行い。それを「人間」と定義した。

ヒトは動物の一部であるにすぎない。それなのに

ヒト=人間ではなく「人と人間」「人と動物」これはナンセンスな対比である。

（日高敏隆）

＜　選択理由　＞

人は動物である。動物には相互扶助がある。故に人間にも動物にも相互扶助はある。

この事から

　相互扶助は人間にも動物にも備わつた生存戦略である。

上記の考えを元とすれば

近代価値観の個人主義(利己的)や自由主義は

個人を種としてしまう　とんでもない錯誤に基づいているとも言える。

ヒトから人間と化した瞬間に相互扶助どころか

生物としての生きる本能さえ失いかけているのかもしれない。

それでは最後に

　【ホモサピエンスよ驕り高ぶる事なかれ】(D さん)

● E さん

【選択回答】

　1　「相互扶助」は、動物にも人間にも備わった生存戦略だと思う

【理由】

「相互扶助」は人間社会の中だけでなく動物界においても行われている、ということではなく、「相互扶助」は人間が考え出したものではなく動物界の生命活動にそもそも備わっている性質であって、人間界はそれを引き継いで人間社会の歴史を形成してきたのだ、というクロポトキン の学説に説得力を感じる。

言い換えれば、動物界も人間社会もこれまで持続的に存続できたのは、「相互扶助」を意識的に努力して続けてきたからではなく、「相互扶助」は本来動物界にも人間社会の中にも備わっていた自然的要因であり、それが実行されてきたからである。

しかし、近代国家成立以降の人間界はその「相互扶助」を破壊してきたので、その結果として、分断された個々人には「相互扶助」の本来的実感が得にくくなっているのだろう。

2019.6.21 最終集約分

土香る会読書会アンケート（その３）／2019 年６月

【問】有島武郎が農民に託した農場運営にとって、「相互扶助」は、目的、それとも、手段？

5 月の読書会では、有島武郎の『惜しみなく愛は奪う』『星座』『小作人への告別』をテキストに、武郎の「相互扶助」を学びました。

クロポトキンは「相互扶助」は本能に基づくものだと主張しました（前回の読書会）が、有島武郎は『惜しみなく愛は奪う』の中で、その説を踏襲しながらも「本能」を「愛」と言い換えて、より緻密な議論を繰り広げました。さらに『星座』の中では、「相互扶助」がダーウィンの『進化論』に由来することを示しました。

また、当日の読書会では、有島武郎が農場を無償解放する際に「相互扶助」の考えを示した『小作人への告別』について様々な議論が飛び交いましたので、皆さんにもアンケートへの回答を通してその議論にご参加いただき、一緒に認識を深めたいと思います。

有島武郎の「相互扶助」が、その後狩太共生農団の運営に大きな影響を与え、「ニセコ町まちづくり基本条例」に引き継がれるべき重要な思想であることを最も端的に表現しているのは、『小作人への告別』の次の文章です。少し長い引用になりますが・・

「誰でも少し物を考える力のある人ならすぐわかることだと思いますが、生産の大本となる自然物、すなわち空気、水、土のごとき類のものは、人間全体で使用すべきもので、あるいはその使用の結果が人間全体に役立つよう仕向けられなければならないもので、一個人の利益ばかりのために、個人によって私有さるべきものではありません。しかるに今の世の中では、土地は役に立つようなところは大部分個人によって私有されているありさまです。そこから人類に大害をなすような事柄が数えきれないほど生まれています。それゆえこの農場も、諸君全体の共有にして、諸君全体がこの土地に責任を感じ、助け合って、その生産を計るよう仕向けていってもらいたいと願うのです。

・・（中略）・・

この上言うことはないように思います。終わりに臨んで諸君の将来が、協力一致と**相互扶助**との観念によって導かれ、現代の悪制度の中にあっても、それに動かされないだけの堅固な基礎を作り、諸君の精神と生活とが、自然に周囲に働いて、周囲の状況をも変化する結果になるようにと祈ります。」（『小作人への告別』T11、『農場解放記念碑文』T11）（**※下線は土香る会事務局**）

【質問と回答】

『小作人への告別』の中で有島武郎が述べている「相互扶助」とは、外界の圧力から自らを守るための戦い方とも受け取れますが、一方では、守るべき農場経営や暮らしを支える日常のあり方としての「相互扶助」とも受け取れます。どちらにも言えることだ、という理解もあるかと思いますが、あえてどちらに重点が置かれているか、と問われれば、みなさんは、どのように答えますか？

１　「相互扶助」は、外界の圧力から守るための戦い方、つまり、手段だと思う

２　「相互扶助」は、外界の圧力から守りたい大切なもの、つまり、目的だと思う

３　わからない

※上記の選択をした理由などについて、自由にお書きください。（次ページに）

アンケートへの回答から

● Ａさん

【選択回答】

1　「相互扶助」は、外界の圧力から守るための戦い方、つまり、手段だと思う

2　「相互扶助」は、外界の圧力から守りたい大切なもの、つまり、目的だと思う

【理由】

あえてどちらかを選ぶことで、議論を発展させることができるのかもしれません。しかし、率直に問われればどちらでもあるのが有島武郎の「相互扶助」の精神だと思います。

碑文の下線部「諸君の将来が、協力一致と相互扶助との観念によって導かれ、現代の悪制度の中にあっても、それに動かされないだけの堅固な基礎を作り、諸君の精神と生活とが、自然に周囲に働いて、周囲の状況をも変化する結果になるように」からだけ読み取ってみたい。

「現代の悪制度の中にあっても、それに動かされないだけの堅固な基礎を作り」は当時の社会の「悪制度」に負けずに農団組織を守り抜き、農場での農作物の生産のための基盤をつくり、様々な困難に力を合わせ一致協力して、個々の農地でなく、農場全体の成果を平等に分かち合う「相互扶助」の精神を説いている、つまり「闘い方」（手段）について述べている。

後半の「諸君の精神と生活とが、自然に周囲に働いて、周囲の状況をも変化する結果になるように」では、農団の成功が、努力の姿が当時の社会から評価されるようになり、社会全体が「相互扶助」を尊重する社会、本能的な愛が支配する無政府的（権力による支配のない）社会を作り上げていくという武郎の理想を述べているのではないだろうか。つまり「相互扶助」の社会を目的としていると読み取れる。

理想の社会を実現しようとめざしている人間集団＝組織は、現状の制度や人間関係に束縛されながらも、その組織内に求める社会のミニ版が形成されていてこそという側面がある。日頃から理想を掲げているのだから、さぞその人間集団は理想的な人間関係を築いているのだろうと一般的には思われている。（と思われる。）しかし、現実にはその集団の中の個人はその生い立ちや個性、それぞれが属している別の組織や人間関係に影響を受けながら日常生活を送っている。おのずと組織内の人間関係が理想的に完成されているものではなく、おかれている社会の影響を色濃く反映せざるをえない。つまり、弱点を多く抱えざるをえない。

その弱点を補うためには組織としての決まり事を尊重し、それを守るように軌道修正しながらお互いの力を発揮するよう努力をすることだ。愛と言い、本能と言って組織や制度を無視するわけには行かない。農団も当然規則をつくり、会合を持って合議しその生産物や生産目標などを決めて一歩一歩進んだことと思う。激しい議論も当然あったことだろう。

有島はクロポトキンの無政府主義に魅かれ、レーニンが指導したロシア革命を支持する

ことはなかった。戦時下の帝政ロシア社会の変革の過程で、亡命先から帰国したレーニンが、当時の革命運動の路線を巡る論争と権力側からの攻撃のもとでの武装闘争で「権力」を握り、革命政府を樹立した。日本を含む各国からの武力干渉とも戦った。広大な国土の農村社会の下での社会変革は「無政府」というわけには到底行かない。しかし、そのロシアでその後スターリンが権力を握り、すさまじい虐殺が行われ、恐怖政治が行われた。人類はこれらのことから教訓をえなければならない。

理想の社会に近づくためには、相互扶助だけでは難しいと思っている。その時代、時代の正確な分析と地道な目的をもった組織的活動が欠かせないと思う。

今の日本の現状があまりにもひどく、ちょっと話が飛びすぎた感があります。

● Bさん

【選択回答】

3　わからない

【理由】

1．武郎の『小作人への告別』の中から抜粋する。

「…諸君の将来が、協力一致と相互扶助との観念によって導かれ…堅固な基礎を作り…諸君の精神と生活とが…周囲の状況をも変化する結果になるように…」

（下線は引用者）

下線部は何故2つを並べたのか。言い換えれば、何故2つが必要で、1つでは不十分だったのだろう。辞書（三省堂　新明解国語辞典）を引いてみる。

※協力一致・・・〈協力〉力を合わせて物事に当たること
〈一致〉組織体・団体の意見や行動目標が一体化すること

※相互扶助・・・〈相互〉関係者のそれぞれ（が主体的に行動すること）
〈扶助〉（経済的に）助けること

とあって、協力一致には「団体の意見や行動が一体化する」とあるし、相互扶助には「関係者のそれぞれが主体的に行動」し、「（経済的に）助ける」という意味があることが分かる。意味するところが微妙にずれているのが面白い。大正時代でも同じ意味だったかは不明だが、やはり2つ合わせないと意が尽くせないのか？

2．外界の圧力があれば、一つの共同体としてまとまって立ち向かう。それは何故か。外界の圧力とは、共同体のまとまりを壊そうとするあらゆるレベルの試みのことであり、それは闘わなければ共同体のまとまりが崩されてしまうからだ。その「共同体のまとまり」を基に立ち向かうことを「相互扶助」と言い換えてよいのかどうか、はまだ分からない。

では何故、共同体のまとまりを維持するのか？共同体内でまとまらず個々バラバラになれば、もはや共同体とは名ばかり。個の利益が優先されることになる。その結果、個の能力が問われ、競争が始まり、格差が生まれることになる。今の言葉で言うところの「自助」

だろうか。他人に気兼ねすることなく自分の判断で働ける代わりに、リスクを一人で背負い込むしんどさがある。「自己責任」という言葉もちらつく。

他方、共同体の一員として動く場合は、自分の考えと異なることも承諾する必要が出てくる代わりに、リスクは全員で引受けるため安心できる側面がある。これが社会保障制度の考え方だろうか。

相互扶助というと、協同組合や同業者組合を思い浮かべる。これらはまさに会員の安心と、外界の圧力への抵抗という二面性を持った仕組みであると言える。同じ考え方や属性を持った者が会員になるという特徴があるだろう。であれば、当然会員数は少なくなり、国レベルの共同体とは違うはずで、そこには相互扶助の考えが入りやすい。

問題が２つ残っている。

１．「相互扶助」は外界の圧力から自分たちを守るための手段か、外界の圧力から守りたい、まさにそのものなのか

２．有島武郎は「相互扶助」にどういう意味を込めたか

１について

私の回答は「分からない」である。

上で辞書の意味を紹介したが、外界の圧力から自分たちを守るためには意見や目標の一体化（協力一致）は欠かせない。意見や目標が一体化すれば団結が生まれる。団結できれば強い。だから「協力一致」は外界の圧力から自分たちを守るために必要なものである。

「相互扶助」は、共同体をまとめるのに欠かせないものだと思う。外界の圧力がなくても内部から崩壊することがある。共同体内部から崩壊しないために必要なものだと思う。

自分の回答は設問の意図とはちょっと違うように思うが、敢えて答えるとすれば、「分からない」になる。

２について

前にも書いたと思うが、有島武郎の相互扶助は縦軸と横軸の両方を包含していると思う。どちらが欠けても成り立たない。特に農場解放の宣言文ではそう読める。つまり、縦軸では自分たち（下位）とより強いもの（上位）との闘いであり、横軸では自分たち相互の団結（平等）である。横軸での結束を拠り所として、縦軸でのより強いもの（外界の圧力）に立ち向かう。

しかし、それ以外の場合でもそういう意味が込められているかは分からない。

● Ｃさん

【選択回答】

①②③

【理由】

農場開放の時点では道付けをしながらも託したわけなので手段に重きを置いていると思う。しかし、それは有島武郎が自己のあるべき姿を示したのかもしれない。

「相互扶助」精神のもと営まれるのものを理想郷とし、現実にするために「相互扶助」を目指す⇒常に時代の変化の中で揉まれ思い描く理想郷が崩壊することなく、前進し守るために有島武郎の「相互扶助」精神を指南とする⇒「相互扶助」精神のもと営まれるものを理想郷とし、……サイクルになっているのか天秤になっているのか悩むところでる。

「小作人への告別」で、『諸君全体がこの土地に責任を感じ、助け合って、その生産を計るように仕向けて行ってもらいたい』とある。そうなっていくためには、指南となる今まで築き上げてきた「相互扶助」精神に基づいた協力一致が必要だと言っているのではないか。

有島武郎は、明治 41 年に吹田順助と芸術・人生・道徳などの問題を論じた後に、「恋愛とは自己犠牲の利己主義。友情とは利己主義的の自己犠牲。」と日記に記しているらしい。手段と目的を愛と友情のように置き換えてみたらどうなるかは私の頭が混乱するので今回は蓋をしておくとする。有島武郎特有の二元論的な思考パターンからいくと、その重きは天秤のようにどちらかに傾いたり平衡を保ったりしていくことで有島武郎は許してくれるのではないだろうか。ただ「家」からのしがらみから解かれる準備としての放棄だったとしたら（!?）、回答③も加わる。よって、回答は①②③すべてとした。

（6/21 現在最終集約分）